

小学校英語教育は 早期英語教育か

いよいよ小学校外国語活動および外国語科の先行実施期間を迎えました。今回は国語科からは少し離れますが、小学生が英語を学習する意義について考えます。

英語を早く学び始めることの意味

既に小学校を卒業してしまっている人にとって、外国語活動にせよ外国語科にせよ、小学校から英語教育が始まるということ自体インパクトがあることかと思えます。「英語は中学校から」というのが今までは常識だったわけですが、十年もすれば「英語は小学校から」があたりまえの新人社員が出てくるわけです。まさに「時代は変わる」です。

さて、それはそれとして、これまでの常識を覆して、なぜ小学校から英語を始めることになったのでしょうか。英語の重要性を考慮してということや、国際的に活躍する人材を育成するためにといった答えが出てくるかもしれません。ただ、これらは英語の重要性の

話で、「小学校から」の理由ではありません。となるとこちらは、「早くから英語を学び始めたほうが、英語がよく身につくから」という考えがあるのではないのでしょうか。

はたして英語を早くから学ぶことで、よく身につくのでしょうか。これについては、研究者の間でもさまざまな見解がありますので、代表的なものを紹介していきたいと思います。

言語習得における臨界期仮説

生まれたばかりのカモのひなが、初めて目にした鳥（それが親鳥でなかったとしても）について行くという話を聞いたことはあるでしょうか。これは動物行動学で「刷り込み」とよばれる現象で、生後から一定の期間にだ

ゆるやかに落ちていくという関係にあるだけではないかという仮説もありえるわけです。

臨界期の有無はともかくとして、このように、言語習得と年齢の間には何らかの関係があるということはいえるかもしれません。

学習開始時期か授業時間数か

バトラ―後藤裕子氏の著書『英語学習は早いほど良いのか』（二〇一五年／岩波書店）では、スペインのバルセロナでおこなわれた英語学習の長期調査が紹介されています。この調査では、英語の学習開始時期によって被調査者を八歳、十一歳、十四歳、十八歳の四グループに分け、それぞれのグループが二〇〇時間、四一六時間、七二六時間の英語学習を終えた時点でさまざまなテストを行いました。

その結果、八歳から英語学習を始めたグループよりも、十一歳、十四歳、十八歳から英語学習を始めたグループのほうが、良い成績だと報告されています。言語習得では、学習開始時期が遅いと、認知的な発達が進んでいることを優位に利用できるためだと考えられます。また、学習開始時期が早いと有利だとされている音声関連のテストでも学習開始時期の影響は見られなかったとのことでした。音声についても他のテストと同様に、学習開

始時期よりも授業時間数の影響が強いという結果でした。

もちろん、これはあくまで一つの調査におけるテスト結果の話であり、学習開始時期を早めることの意義を全面的に否定するわけではありません。ただ、学習開始時期だけを早めれば、即効果があるというわけではなさそうです。また、他の調査では、早期英語教育の恩恵を受けるには英語による良質かつ大量のインプットが必要であるという報告もあります。これも重要なポイントです。

小学校から英語を始めるということとは

それではここまでの仮説を踏まえて、小学校英語教育は早期英語教育といえるのか改めて検討してみたいと思います。

まず、小学校三年生からという時期は、臨界期と重なります。言語習得における臨界期が存在するのであれば、この時期に始めることには意味があるといえます。ただし、先にも紹介したように、十二歳前後までという臨界期仮説は、研究者によってさまざまな見解があり、現時点では「必ずある」というような科学的根拠が明確に示されているわけでは

ありません。次に学習開始時期と授業時間数の関係です。

け生じるといわれています。この特別な期間のことを「臨界期」と呼びます。

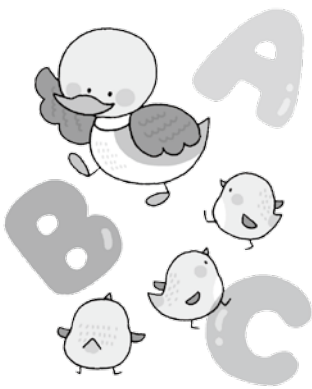
「早くから英語を学び始めたほうが、英語がよく身につく」という説も、実はこの「刷り込み」における臨界期から来ています。言語習得における臨界期を提唱したレネバークによると、思春期の十二歳前後までが臨界期とされています。

ただし、臨界期がこの期間で正しいのか、そもそも言語習得における臨界期があるのかということすら、研究者によって見解が違います。例えば、言語習得に限らず、人間は年齢を重ねるとともに運動能力や認知能力など衰えていくものがあります。ということは、臨界期のような明確な期間があるわけではなく、年齢を重ねると言語習得のための能力が

バルセロナの調査では、学習開始時期を早めただけでは、英語を身につけるのに優位になったという結果は出ませんでした。授業時間数が多くなれば言語習得が進むのは当然ですが、予想していた以上に授業時間数の影響のほうが大きかったというわけです。

この二つの結果から考えると、小学校から英語教育を始めた「だけ」では、早期英語教育とはいえないのではないかという結論になります。なぜなら、これから始まる小学校での外国語活動・外国語科では、授業時間数に限りがありますし、英語によるインプットも限られると思われるからです。

学校教育において小学校から英語を始めることは、これまでの常識を変える大きなインパクトがあります。小学校から英語を始めた「だけ」では、早期英語教育として機能するわけではありませんが、まずは「きっかけ」として大きな一歩になるといえるでしょう。



イラスト：カモ

京都外国語大学教授
森 篤嗣
もり あつし



1975年、兵庫県生まれ。国立国語研究所准教授、帝塚山大学教授などを経て、現職。国語科教育だけではなく、外国語としての日本語教育の研究にも従事する。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。